銀河よ滅べ！帝国最強！

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀河よ滅べ！帝国最強！

【Ｎコード】
Ｎ８９１４Ｚ

【作者名】
やった

【あらすじ】
なんか幽霊に振り回される話

0　プロローグ

「……これは、リアル？」

ははは と、乾ききった笑いを溢す僕。これ以上ないっていう程に、顔が引きつっていた。

銀河最強兵器の一つであるアンセル粒子砲が、つい十秒前まで僕の目の前にあった“帝国軍の墓場”を、戦闘演習用の無人ターゲットもろとも、燃やし尽くしてしまったわけで。

誰が犯人かって？　すみません、僕です。

ああ、そうとも。戦艦ラズホワイトで航行しながらの宇宙訓練実習、その一つである人型戦闘兵器ジオフレームの狙撃訓練中に、演習用のスペースデブリにならないがモットーのしょぼい実弾銃と間違えて、ついつい小型アンセル粒子砲を持ってきてしまったのは僕でございますよ。

ええ、そうですよ。だから何？　ゴミを燃やしただけでしょ。僕は悪いことなんかしてない。むしろスペースデブリを減らしたんだ。むしろそれは良いことなんじゃないの？　結果的に。

うん、決まりだ。言い訳はそれでいこう。胸を張って言ってやればいい。

「スペースデブリを消すために、意図的にやりました……的な」

……なんて、そんなことは言えるはずもない。

僕こと曽根川光(そねかわひかる)は、自分の主張を通すのが何よりも苦手なのである。

心ばかり強気の内弁慶。まぁ、関係ないか。心なんて、誰が見てるものでもない。

『そうか、それが貴様の見解か。中々に心が狭く、見所のないヤツだな』

……え？

おかしいな、今。何か聞こえた気がしたけど。

『気のせいではないぞ、曽根川光』

僕の頭の中に、女性のハスキーな声が響き渡る。……気のせいではないらしい。となれば、なんだ？　幽霊か？

『うむ、その通りだ。私はリリーナ・ツヴァイ。第一次銀河大戦時、シリウス第一帝国軍の《覇姫》と呼ばれた将軍だ。さて、今、一つ確認させて欲しい。――我が墓標荒らした言い訳はそれで終わりか？』

……へぇ。第一次銀河大戦ですか。なにそれ何百年前の話。

いや待て。バカな、有り得ない。僕は疲れが溜まっているのだ。こういうときはさっさと戦艦ラズホワイトに戻って、閃光の如く寝

るに限る。よし、帰ろう。

『なるほど、黙殺か……やはり愚者のようだな、貴様は。仕方あるまい、分からせてやろう』

「……！？」

突然、意識が遠くなる感覚。目から鼻から、あるいは口から、何かが抜けていく。

――なんだ、これは？

気付くと、身体が思うように動かせなくなっていた。

しかも、それだけではない。

「分かったか？　こういうことだ。貴様は、貴様が言うところのスペースデブリの怒りを買い、見事、私に呪われたというワケだ――おめでとう」

……僕の口から、僕の声で、僕じゃない誰かによって、その言葉が紡がれていた。

「ふむ、しかし良い機体だな。五百年の月日にしては、やや物足りない進化ではあるが――」

あらまぁ、勝手に僕の訓練用機体、ＲＸ－２８８が動いてらっしゃる。いやいや、ぞっとする。信じられない。しかし、信じざるを得ない、この状況。

なるほど、“僕は何かに身体を乗っ取られたらしい”。

不意に焦り出し、慌てて叫ぶ。

『ご、ごめんなさい！　なんでもします！　だから、ど、ど、どうか、身体を返してください……！』

「……ほう、言ったな？」

にやりと笑う、僕ではない誰か。するとさっきとは逆に、何か、自分そのものに吸い込まれるような、奇妙な感覚に襲われる。

「……戻った」

僕は呟く。良かった、僕の身体だ。正真正銘の僕の身体。

『何を言っている？　それは既に貴様の身体ではない――私と貴様の身体だ』

安堵は一瞬。サーッと青ざめる僕の顔。ああ、夢じゃなかった。なるほど、どうやらスペースデブ……じゃない、帝国軍の墓場を燃やし尽くしてしまったがために、僕は幽霊的な何かに呪われてしまったようである。――って、本当か？

『まだ疑うとは、救いようもなく愚鈍な感性だな……。いいか？貴様にはこれより、我が墓標を荒らした責任をとってもらう。“帝国兵士達の遺志”を継ぐのだ。もしもそれが果たせなければ、貴様は貴様が荒らした墓標に眠る、我が約三万の配下たる兵の亡霊に呪われて死ぬしかない』

「はぁ……三万人の呪いですか……えっ」

喉が乾燥する。バカバカしい話だが、しかしだんだんと真実味を帯びてくる。

近年はゴースト・エーテルと呼ばれる研究が進んでおり、幽霊や呪いが存在するという論拠が、科学的に示されつつあるのだ。

なにより、背中が寒い。背後より不穏な波動を感じてなりません、母上。

「え、あの……ぐ、具体的に僕はどうしたら許される感じでしょうか……」

『決まっているだろう。我らの敵は誰だと思っている？』

姿なき幽霊……リリーナ・ツヴァイを名乗る誰かは、嬉しそうに言葉を返してきた。

『――銀河連邦をぶっ壊すのだ』

◇

「ぶはぁ！」

僕は飛び起きる。今は何時だ？　脳チップにアクセスを試みる――早朝六時か。なんだか物凄く汗をかいているけど、仕方がない。あまりにリアルすぎる夢だった。

僕が見た夢。

ＲＸ－２８８での狙撃演習を行っている際に、五百年前の大戦時に活躍していたシリウス帝国艦隊の残骸を滅却。その後、《覇姫》ことリリーナ・ツヴァイを名乗る幽霊による憑依。彼女は、よくよく考えると歴史の教科書にも載っている有名人だった。まったく、変な夢だ。その後のことは覚えていないが、とにかく怖い夢だった。

『まぁ、夢ではないんだがな』

「ぐわぁ！？」

僕は仰天し、真っ白な部屋の中心に位置する真っ白なベッドより、後ろ向きに落ちる。僕が今いる戦艦ラズホワイトには、１３．１Ｇの重力がかかっているのだ。

にしてもこの声――ははは、夢じゃなかったの？　よーし、そんなの信じないぞ。

『昨夜は楽しませてもらったぞ。貴様ときたら、初めての浮遊のショックによって魂と身体の間に一時的なズレが生じ、今までずっと意識が飛んでいたワケだからな。その間、私がこの身体を好きに使わせて貰った。悪く思うなよ』

「……ちょっとタンマ」

異議アリ。

『なんだ？』

「なんだじゃないですよ！　どうしてくれちゃったんですか、僕の身体！　っていうか、そもそも、」

ここ、どこ。この部屋よく見たら僕の部屋じゃないし。ベッドを真ん中に置くとか、そんな空間機能的に無粋なマネはしないし、僕。

『ああ、それはだな、そのうち分かるだろう。それより、貴様に言っておかなければならないことがある』

「……な、なんだよ」

『現在、曽根川光は私の活躍により、一級違反者となっている。おめでとう』

「……」

『おめでとう』

「ぜ、全然めでたくないですよ！　何故そこを二回言うかな！？　つーかあんた、一体何をやりやがりましたか！？」

『なに、大したことではない。腕試しにＲＸ－２８８で貴様の上級生に模擬戦を仕掛け、敵機の両手両足を斬り捨て、粉々に粉砕、爆破しただけだ』

どうやら壊してはいけないモノだったらしくて怒られてしまったがな、とリリーナ・ツヴァイは明るく言い放った。

「さ、最悪だ……。あんたは歴史的暴君ですか！？　あ、歴史的暴君だった……」

『面白かったぞ。みるみる青ざめていく相手の顔がな。まぁ、しか

し彼には感謝している。なにせ、逃亡劇を手伝って貰ったからな。もっとも、最後は別の少女の手を借りることになったのだが』

「ちょっと待って、なに、逃亡劇？」

『ん？　ああ、一級違反者になったと言っただろう。ならば二週間の禁固刑は確定だ。しかしそうなっては遊べまい？　故に面倒だから、刑に処される前にこうして逃げ切ったのだ。というわけで、今頃上の連中は血眼になって貴様を探しているだろう、曽根川光』

「言葉が出ない」

僕はもはや、何ていったらいいのか分からなかった。つまりアレか。寝てる間に僕は犯罪者ですか。なるほど、素晴らしい呪いだ。あ、やべ、泣きたい。

『まぁ、そう言うな。私には、貴様が言うところの《ゴースト・エーテル》なる力がある。例えば、これだ』

次の瞬間、何者かが僕の目の前に突然姿を現した。

蒼穹に深緑が並ぶオッドアイの瞳――おそらく、彼女がリリーナ・ツヴァイなのだろう。真っ直ぐに切りそろえられた長髪は淡い緑色で、鼻は高く、切れ長の二重が高貴な印象を与える。黒を基調とした対熱、防弾の合成服に、真っ赤なマントを羽織っていた。おそらく、五百年前にシリウス帝国軍が使用していた軍服に違いない。

『将軍仕様の、な』

ちくしょう、付け足された。

まぁ、しかし、率直に言って、そこには絶世の美女が浮いていた。幽霊だからか肌は圧倒的に白く、透き通っている。年の頃は二十と思われ、背丈は僕と同等で高めだ。

『ふ……ありがとう。だが覚えておけ。貴様のその見方は《覇姫》たる私に対する侮辱だ。私は女である前に将軍なのだ』

いや、二つ名に姫とかついてますがな。……嘘です嘘です。そう睨まないでくださいな、将軍閣下。

「しかし、心の中で思うなってのも無理があるかな、と。そもそも、出来たら僕の思考を覗かないで欲しいんですが……」

僕は目の前にいる、高貴な幽霊に告げる。

『検討しておこう。貴様がどういう男か、理解が済んでからな』

リリーナは頷き、続けた。

『ところで話を戻すが。今貴様が見ているこの姿は幻覚に過ぎないのだよ。貴様に部分的に憑依することで、私のイメージを見せているのだ。これが我が《ゴースト・エーテル》の力の一つ――具現化、だ』

「……正直、どうでもいいですけどね。そんなことより、これからどうすればいいかで頭がいっぱいなんですけど……」

と、その時。

「あら、もう起きていたのね？」

「……！？」

僕は、その突然の出来事に絶句する。生体認証の自動ドアから、さも当然に入ってきたその少女――上之宮玲菜（うえのみやれいな）。

僕は彼女のことをよーく知っている。長い金髪が目立つ、お嬢様系の美少女。銀河連邦が誇るアークコロニー「ヒノマル」。Ｒ００９７支部に位置する、ジオフレームパイロットの訓練校、私立桜ノ宮学園二年――“Ｘ組”。僕と同じく、宇宙訓練実習のためにこの戦艦ラズホワイトに乗り込んできた一人だった。

彼女は僕と同じ学年だ。クラスは違うものの、実は僕は彼女に特別な感情を抱いているわけで……って、しまった。将軍様に心を読まれてるんだった……まぁ、いいか。諦めよう。

とにかく、とにかくだ。そんな美少女、上之宮さんが普通にこの部屋に入ってくるってことは、まさか。

『正解だ。貴様的思考によれば、この部屋は機能的に無粋らしいが――残念だったな。“愛すべき彼女の部屋”が無粋で』

んん？　えーっと。

つまりあれか。……ここは、上之宮さんの部屋ってことかな？

え、本気で？

『正解だ。まぁ、調子を合わせておけ。ここを追い出された瞬間、貴様は禁固刑に処されるわけだからな。その上、貴様が捕まれば彼

女も共犯だ。それは、避けるべきだろう？』

……よし、リリーナさん、後で話があります。

「どうしたの、光？」

怪訝そうな顔で僕を覗き見る憧れの彼女。しまった、よく分からないけど話を合わせなければ。

「あ、ああ、おはよう、上之宮さん」

「どうしたの？　急に改まっちゃって。彼女なんだから、玲菜でいいわよ」

「彼女！？」

リリーナさん！　ちょ、ちょっと昨日何があったのリリーナさん！？

『そうそう、その女は私が攻略しておいた。共犯を成功させるためには、色恋沙汰で釣るのが一番だからな』

最悪だった。リリーナ将軍閣下はなんかもう、本当の本当に最悪だった。人の留守中に何やってんのさ。つか攻略って何だよオイ。今度教えてくださいよその極意。

ま、まぁ、仕方ない……、もうこうなりゃヤケだ。頑張って話を合わせよう。

「あ、ああ、そうだね。玲菜さん……じゃなくて、玲菜」

「ええ、光。それにしても、昨日の夜は素敵だったわ」

「そ、そうだね、素敵だったね」

「見た目によらず、意外と太くて硬くて、たくましいのね」

リリーナァァァァァ！　何してんだァァァァッ！

というか何故僕を起こさなかったぁぁぁぁぁ！

「……えっと」

「本当に、華奢に見えるのに不思議ね――光の腕。最高の腕枕だったわ」

……む？

『ふ……バカな男だな、貴様は。いくら貴様の肉体が男だとはいえ、私が女と性交渉をするはずがないだろう？　気色が悪いことを想像するな。単に腕を貸してやっただけだ』

……良かった。しかしバカだの気色が悪いだの煩いぞ、リリーナ・ツヴァイ。大体、僕はあんたのことをなんて呼べばいいんだ。

『リリーナでいい。私も貴様のことは光と呼ぼう。敬語も必要ない。今の私に年齢の概念はないし、階級の概念もないからな』

……了解。

と、上之宮さん……じゃない、玲菜が、僕の方を怪訝そうな表情で見ている。怪しまれないようにしなくては。

「で……今後のことなんだけど」

「ええ、分かってるわ。言われた通り、調べてきたから。ＣＸ－８０００、《朱雀（すざく）》。まるでスペックが不明の特別な機体が、秘密ドッグに格納されているわ」

「……う、うん」

「というわけで、行きましょう」

玲菜は不敵に微笑んで見せた。つか、何の話だい？　リリーナ、あんた一体彼女に何を調べさせたんだい？

「――《朱雀》を奪いに、ね」

あれ……なんだかとんでもないことになって来ましたけど。

◇

「怖い……怖すぎる」

現在、何故か僕は大型のトランクケースの中に入っている。このケースは最新技術の賜物のようで、あらゆる先進的なセンサーを突破するように作られているらしい。

時にジャマーをかけたり、時に情報を偽装して返したり。よく分からないが、この中にいる限り安全、ということだった。

『そう疑うな。私もこれで助かったようなものだ。貴様は一級違反者なのだから人目についてはならない。仕方ないだろう、我慢するがいい』

しみじみと言うリリーナ。くそっ……あんたのせいだろ。っていうか幽霊は快適でいいよな。こっちはこんなに狭いというのに。

『そうか？　ならば代わろうか。私が貴様の身体を動か――』

「結構です」

僕は心を閉ざすように強気で返した。また意識が飛んで、気付けば状況が滅茶苦茶に、ということだけは何としても避けたい。

「…そもそも、僕は今まさに巻き込まれている“こんなこと”には反対なんだよ。まぁ、断りきれなかったのは僕の責任だけどさ」

ため息一つ。上之宮さん――玲菜に言われるがまま、僕はつい流され頷いてしまい、そのまま勢いよくトランクに詰め込まれたというのが現状。

どうやらこれから僕らは、《朱雀》という特別な機体を盗みに行くらしい。発案者はもちろんリリーナで、玲菜がそれに乗った形だ。目的はよく分からないが、どうせいいものじゃないに決まっている……。

僕が二つ目のため息と吐くと同時、不意に会話が聞こえてきた。

「あら、上之宮さん、ご機嫌麗しゅう。どちらへ行かれるのです？」

「ちょっと十二番ドッグへ。昨晩細切れにされたという、噂のジオフレームを拝見したくて、ね」

「あら、貴女もでしたか。私も行ってきたところですが、すごい人だかりでしたよー」

「あら、そう。なら、混まないうちに急がなくちゃね」

女生徒との会話のようだ。なるほど、リリーナが昨晩起こしたらしい細切れ爆破事件は相当派手な事件だったらしい。

「にしても、犯人――曽根川光さん、まだ捕まってないらしいですからね。聞くところによれば、逃亡によって一級違反者から三級反乱者に格上げされたらしいですよ。コロニー追放は確実ですって」

……はい！？

◇

「コード確認、開きます」

噂の秘密ドッグとやらへの最初の入り口が開かれたようだった。

僕は内心穏やかではない。捕まったらコロニー追放？　冗談じゃない。せっかく高いお金を出して、桜ノ宮学園にやってきたというのに。

『まぁ、落ち着け。慌てても仕方がないだろう？』

あんたのせいやっちゅーに！

「十二番ドッグからのルートは一番手薄なのよ。予定通りね。私のＩＤで第一認証も突破出来たわ。でも大変なのはここから。第二認証以降は武装した警備部隊が門番についているわ」

玲菜は焦っているようだった。それなら、悠長に僕に語りかけていいのか。やばいんじゃないのか。

ちなみにこのスーツケース、内側からは防音だが、外側の音は拾える仕様だ。

「でも大丈夫。対策済みだからね。三……二……一……開始」

直後。

遠くで小さな音が聞こえたと思ったら、なにやら急に静かになった。

その後、近くで爆発音。不穏だ。やばい、これ、完全に不穏だ。玲菜さん、どうなされましたか。説明を希望する。

『そうだな、状況を説明してやろうか。まず艦内の電源が落ちた。その隙に玲菜が時速五十キロ程の速度で敵兵に近付き、気絶させた。すぐさま、ロック機構を手順に従って爆破。モバイル電源で部分的に電流を流し、爆破したロック部分をショートカットするようにプログラムを書き換え、物理層を一時的に修復ナノで代用、そして、』

「分かった、もういい、もうお腹いっぱいです……」

もはやテロの領域だった。っていうか上之宮さん、あんた何者？

『ふふ……あはははっ！』

ふと突然、リリーナが笑い出した。何事か。

「どうした将軍。気でも触れました？」

いつものことかもしれないが。

『失敬だな。私の部下だったら首が飛んでいるぞ。いいか、よく聞け、光。おかしいと思わないか？　“予備電源が入らない”。これは玲菜の計画には含まれていないことだ』

リリーナは言う。スーツケースの中からでは分からないが、外は真っ暗のまま、ということだろうか。

『そうだ。それに面白いことにな、対光学、対ＲＤ完全ステルス機が一機、一番ドッグに侵入したようなのだ。どこからワープアウトしてきたのか、私には見当がつかないが……とにかく、第三者が何かを狙っているのは間違いない。となればだ。さて、スーツケースを開けてみろ、光』

「……」

まったく、なんだっていうんだ？　まぁいいだろう。言われるがままに、僕は手順に従ってスーツケースを内側から開けてみる。

身体を伸ばしながら、呻くように背伸びを一つ。……暗い。完全なる闇、深遠だった。そんな中で気になるのは“音”だ。視覚が意

味をなさないこの状況だからこそ、不穏な足音のような何かが耳に障る。

『私が貴様の視神経に直接介入して、一時的に暗視に強い状態にしてやろう。方角も示す。いいか？　九時の方角に進め。男が二人倒れている。右側の男からルジェムガンとレールガン、ルジェムナイフを奪え』

「……了解」

何がなんだか分からないが、言われたとおりにするしかない。とりあえず、今のところは。

『目的が必要か？　そうだな、ならはっきりさせておこう。侵入者の狙いはＣＸ－８０００、《朱雀》だ。別ルートから秘密ドッグに迫ってきている。早くしないと、玲菜がやられるぞ』

リリーナは一時的に僕の前に姿を現し、にやりと笑ってみせる。

侵入者。なるほど、侵入者か。……え、侵入者！？

『恐れるな。貴様は私とともに天下をとる男だろうが。ならば好きな女ぐらい守ってみせろ』

リリーナは無茶苦茶言っていた。……あの、僕はしがない学生なんですけど。

◇

秘密ドッグ――正式名称、十三番ドッグ。数百メートル四方の広

大な空間に、見たことのない一体の巨大な機体がそびえ立っていた。それはＣＸ－８０００、《朱雀》に相違ない。

「あら光、そっちから来てくれるとはさすがね。ラッキー、一端戻る手間が省けたわ」

僕を見て不敵に笑うのは上之宮玲菜。彼女は丸腰のようだった。

どうやら彼女のおかげで、僕はここまでとくに痛い目に遭うこともなく真っ直ぐ来れたらしい。ここに至るまでに僕は伏した警備員たちを大勢見てきた。そして幸いにも、侵入者には僕も彼女も未だ遭遇はしていない。

「ああ……まぁ、ね。それより、大丈夫？　ケガはない？」

一応心配を口にしてみる。しかし彼女は余裕で首を横に振る。

「あるわけないって。ねぇ、ところでこの事態、どういうことか知らない？　何故かＮＮ（ニューロン・ネットワーク）に繋ぐことも出来ないし。ここまで来るのには好都合だったけど……電源が復旧しないと起動機を動かせないわよ？」

「ああ、どうやら第三者が第一ドッグに侵入してきたらしい。そして、敵の狙いは――」

「――スレイプニルからフェンリルへ。ポイントＤ・ターゲット・キャッチ。照合率９９．８７％。他、少年少女の二名の姿を目視にて確認」

突然、男の声が反響し、僕の言葉が中断された。慌てて声が聞こ

えた十時の方向へと視線を向ける。

男が約二名。彼らは二手に別れ――、

『伏せろ！』

刹那に蒼い閃光が奔った。高密度の光の輝き――僕は間一髪右前方に転がり、それを回避する。要はあいつら、いきなり撃ってきたのである。

床から熱を感じる。狙いは正確だ。なるほど、どうやら敵は暗視コンタクトをつけているようで、暗い中でも僕らの姿が見えているらしい。

しかし、それは僕も同じこと。原理は不明だが、リリーナのゴースト・エーテルとやらで、やたらと目が良くなっているのだ。故に“正確に避けられた”。

「にしても……空間スタン銃、か」

自分で言うのもなんだが、僕は授業は良く聞くタイプである。だからこそ、知っている。敵の銃。あれは広範囲に効果のある破裂散布型のスタン銃だ。授業で習った。発射時に蒼く光ることが特徴で、一撃で気絶する電撃が着弾から半球状に広がる。

故に左右に回避しただけではダメだ。半球の範囲外に出なければ電撃にやられてしまう。

そのまますかさず僕は斜め前方へ、転びそうになりながら走り抜けた。

「……ほう」

感心する相手。しかし、空間スタン銃を使うような相手か。やっかいだな。いや、武装なら勝っているんだけどね？　こっちは一撃必殺のルジェムガンにレールガンだし。

それが逆に最悪なんだけどね。ルジェムガンもレールガンも対人兵器としては最高峰の殺傷力を持っている。高いエネルギー効率で、一撃で人体に致命傷を与える。普通に殺してしまいかねないっていうか。僕的に、殺人罪はさすがにごめんだった。

『仕方のないヤツだな。少し代われ』

「……！？」

直後、僕は弾かれる。霊的な意味で。

『あんた……またしても！』

突然のバトンタッチだ。僕の身体は今、リリーナによって支配されてしまっている。

（黙れ光。気が散る。先ほどの貴様と違って、視界が悪いのだ、こちらはな）

テレパシーのようなものが伝わる。そうか、そういうことか。リリーナに代わると、リリーナはゴースト・エーテルを行使することが出来ない……。つまり、先ほどの僕の時と違って、視界が真っ暗なんだ。

「もっとも、視界なぞ私には不要だが、な」

リリーナはそう言って。

躊躇なく、

何の躊躇もなく、

――撃った。

間の抜けたような電子音。彼女は二丁の銃で、二人を同時に撃ったのである。それも、二発ずつ、計四発。

『ってちょっと待てぇぇぇ！』

人殺しですか？　まじで？　ちょっと待て洒落にならないぞ、ついに僕は学生の身でありながら人殺しの罪まで……。

（バカめ、相手がスタン銃とはいえ、攻撃された以上は正当防衛だ。それに早計だな。よく見ろ、ヤツらの武装と暗視ゴーグルを燃やしただけだ。殺してなどいない。もっとも、視界酔いでしばらく動けないだろうが）

……その通りだった。霊体（？）となった僕は暗い中でもそれが普通に確認できる。敵と思われる二人の武器とゴーグルだけが発火していた。しかし、狙ってやったのか？　一体どれほどの腕前があれば、そんなことが。

（さて……交代だ、光）

ぽかんとする僕。次の瞬間には、普通に自分の身体の手足を動かせるようになっていた。

『いいか光。奴らが視界酔いで動けないうちに《朱雀》の元に走れ。私がゴースト・エーテルで、一時的に起動機を動かす。それで出撃だ』

「……なるほどね」

ゴースト・エーテルは電気に通じるものがあると聞いたことがある。リリーナが能力を使うためには、霊体である必要があるのだろう。

すなわち、僕に憑依したままでは《朱雀》を起動させることが出来ない、と。

僕は頷き、すぐさま《朱雀》の元へと走る。

「さすがね、光。惚れ直したわ！」

《朱雀》の足元、起動機のところに玲菜が立っていた。ちゃっかり無事だったんだな。良かった。

しかし彼女はため息混じりに言う。

「でもお手上げよ……動かないわ、起動機が。どっかの侵入者のせいで……」

「大丈夫だよ。玲菜、コクピットへ！　僕に続いて！」

「へ？　……え、ええ。分かったわ」

非常用の梯子を使って僕と玲菜はコクピットに上っていく。視界酔いで呻く二人の侵入者の様子を伺いながら、何とか目的の場所へたどり着く。

しかし、ハッチが開かず、コクピットには入れなかった。

「内部起動機と外部起動機が連携している仕様ね……どうする気？光」

頼むよ、リリーナ。

『問題ない。しばし待て』

「大丈夫、問題ないってさ」

「へ？」

面食らったような玲菜。間違えた、リリーナの声は彼女には聞こえないんだった。

と、不意に。

僕の頬を熱が掠めた。

「……！？　しまったわ、光！　あいつら、私たちを狙ってる！」

視界酔いから覚めたのだろう。次は当てるぞ、とばかりに侵入者

の一人が無言で銃口をこちらに向けている。

どうやら予備の銃を持っていたらしい。出力が低めのレーザータイプのようだが、遠くまで届く。胸を貫かれれば余裕で死ねる、コクピットの前で動けない今の僕らにとっては驚異の武器だ。

「く、リリーナ！　急げ！」

『慌てるな。ゴースト・エーテル、発動する！』

急かす僕を制しながら、リリーナが声を大にする。プツッと変な音がしたかと思うと、急にコクピットハッチが開いた。

「うそ……ホントに開いた」

「急いで！」

僕は彼女をコクピットに無理矢理押し込むと、それに続いた。

ハッチを閉めて間一髪レーザーを遮断する。《朱雀》は一人用のようだが、座席の背後にもう一つ、展開できそうな折り畳み式の席があった。

「可変複座式……？　まぁいいわ、えーっとこれかしら」

玲菜が何かのボタンを押すと、もう一つの座席が展開された。

『さて……準備はいいか？』

メインシートに僕が座り、サブシートに玲菜が座る。コクピット

ハッチを閉じ、レバーを握り締める。

……って。僕、こんなすごいジオフレーム乗ったことないけど、大丈夫か？

まぁいい。とにかく準備は万端。あとはドッグとの接続を外して、外部起動機を動かし、三層ドッグハッチを全て開き……あれ、結構あるな。

『杞憂だ。全て任せておけ。電気が通れば全て万事上手く行く。“必ずな”』

そうして、リリーナは動いた。

『――ゴースト・エーテル、全力展開！』

「……うおおおお！？」

充填されるエネルギー、迸るプラズマ。どういう仕組みか分からないが、《朱雀》はドッグの接続部より切り離され、完全に起動した。

「うそ……電源が通ってないのにドッグハッチが開いていく……こんなことって……」

玲菜も驚きを隠せないようだ。当たり前だ。こんなものはただの怪奇現象でしかない。

『さて、行くぞ光。起動パスコードは電子的に破壊しておいた。とにかく、ＲＸ－２８８と同じように発進させればいい。私はしばら

く索敵に回ろう。侵入者が自分の機体に戻ったようなのでな。奴らはおそらく、凄まじいステルス性能を持っているはずだ』

リリーナは落ち着いた様子で告げる。確かに、未だ艦への進入が公になっていない侵入者である。彼らが如何にしてこの艦に侵入したかを考えれば、その答えはいくつかに絞れる。

例えば彼らが何らかの機体によってドッグにとりついたのであれば、そのステルス性能は普通のものではない。

「了解――曽根川ひかる、《朱雀》、出ます！」

ＯＳは立ち上がっている。ヘッドアップディスプレイの並べられる情報と、囲むように展開されたメインモニターを確認しながら、レバーを倒し、スラスターの出力を全開へ。そもそもなんでこんなことをしているのか、なんてことは頭の中から飛んでしまっていた。

とにかく、今は誰にも捕まりたくない。コロニー追放は嫌だし、玲菜を巻き込むのもごめんだ。だからこそ、飛び立つ。

我ながらぶっとんだ思考回路だ。だけどもしかし、いつだって周りの状況のほうがぶっとんでいるわけで。

『敵機接近。注意しろ光。やはりヤツらもジオフレーム乗りだ。どうしてもこの機体が欲しいようだな』

早速おでましか。もうどうにでもなれ。

「ああ、もう最悪！　強奪失敗じゃん！　ちょっと、そこのキミ！」

僕が覚悟を決めると同時。突然、《朱雀》に通信が入った。公開回線で割り込まれたらしく、通信受信モニターにぴょこんとアホ毛が伸びた女の子が映っていた。

「……なんでしょうか？」

嫌な予感を感じつつも、健気に返答する僕。案の定、彼女は不穏な言葉を返してくるのであった。

「その機体……獲らせて貰うよ！」

いきなりの宣戦布告とともに、真っ白な機体が現れた。ちなみにこちらの《朱雀》のカラーは確か真紅だ。もっとも、それどころじゃなかったし、形がどうだったかなんて大して確認できていないのだが。

『光。敵機は一機ではない。三機だ。油断するな。二機の狙撃機が九時方向に下四十二度、二時五時方向に上八十八度より狙っている。とにかく前方へ離脱しろ』

「くっ！」

僕は両のグリップを握り締め、前に倒す。戦術ＡＩのサポートがあるおかげで、幾分か操作は簡略されている。

刹那、電磁的な輝きが背後に逸れ、流れた。……あっぶね。

っていうか、獲らせてもらうとか言っておいて破壊する気満々じゃないですか、あのアホ毛女め。

「さすがね、光。しかし、今のルジェム光……複数見えたような」
「ああ、敵は一機じゃない。三機だ」
ふぅ、とため息を吐きながら、僕は機体を反転。次の攻撃に備える。
「……レーダーには映ってないけど」
「ルジェム粒子か、リムレット粒子を散布されているんじゃないかな？」
「……なるほど。でもどうして敵が三機だと断言できるの？」
玲菜は細かいところにこだわっている。慎重派なのだろう。とはいえなんて言ったらいいものか。
「それは……」
『ＰＳＹ――超能力とでも言っておけばいい。私とこれから行動をともにするのだ。超常現象は当たり前だぞ？』
リリーナに釘を刺される。仕方ないか。ごめん母さん、僕、結構大きなホラ吹きます。
「……ＰＳＹだよ。なんていうかその、僕は周りのことが見えたりするんだ。あと、ほら、ちょっとした電気なんかも起こせたり」
「どうりで。長谷部先輩を瞬殺するのも頷けるわ。でも安心して。私、そんなことで貴方を嫌いになったりしないから。いいえ、むし

ろ好きになったわ。私はね、強い人が好きなのよ」

……ああ、そういうこと。ようやく合点がいったよ。ということは？

「さぁ、光。貴方のかっこいいところ、私に見せてちょうだい！」

オーケー、うん、了解。……リリーナ、早速だが交代しようか。

『ダメだ。先ほどのゴースト・エーテルで消費しすぎた。しばらくは貴様で何とかしろ』

「……なんだって？」

僕、よく考えたら実戦経験とかないんですけどぉぉぉ！？

お、落ち着け、待て待て待て。僕は射撃訓練でスペースデブリを燃やし尽くすような男だぞ。やばいって、一機でも絶対無理なのに、三機相手とか……っていうか、そもそもなんでこんなことになってるんだ？　お母さん助けて下さい。

『現実逃避している場合か？　安心しろ、私が敵の動きを読みきる。それより光、次が来るぞ。防御フィールドくらい展開したらどうだ』

「ちくしょう、簡単に言ってくれるよな……！　コンソールパネルはＲＸ－２８８に近いみたいだけど、複雑すぎる！　そもそも防御フィールドなんて……」

言いながら、僕はコンソールに目を落とす。軽くいじってみるが、やはり良く分からない。こんな機体の操作方法なんて授業では習っ

ていない。

って、やばい、しまった、後方よりビームが。

洒落にならん！　とにかくスラスターを吹かそうと試みるが、僕のこの反応速度では、とてもじゃないが間に合わない……！

「あ、防御フィールド？　大丈夫、それなら今展開しておいたわ」

ＲＤＦジェネレーター起動。《朱雀》の状況を示すディスプレイを見る限り、ルジェム粒子が《朱雀》後方に展開されたの翼状の部分から防衛濃度で散布されたようだ。

防御力場が生成され、放たれたビームを対消滅。何とか凌いだ……のか？

「細かい操作は私に任せて、光。それより移動と射撃、頼んだわよ」

「はは……了解」

上之宮玲菜。さすが、“Ｘ組”は違うな。頼りになる。

どうやら、彼女の手元にも専用コンソールがあったようだ。複座式っていうのも伊達ではないらしい。

『光。頑張ってもう少し耐えろ。こちらはまだかかりそうだ』

……了解ですよ、帝国覇王のお姫様。僕は頷き、モニターを注視する。

一方、玲菜は口早に。

「９７ｍｍバレルライフルを左手に携行させるわ。反撃といきましょう。右手の甲から可変式ルジェムブレードを出すことが出来るけど、常時使用は危険ね。いい？　ＲＸ－２８８と操作方法は基本的に同じよ。グリップを離さないで。あと光、残念なお知らせがあるわ」

「……残念なお知らせ？」

『右舷、来るぞ。真上にブーストだ』

「……っ！」

答えを聞くより先に、言われるがまま、僕は真上に向かって飛翔する。間一髪回避。

『そのままステップ軌道で左に回避。まずいな、奴らそろそろ様子見を止めて同時に来るぞ』

おいおい勘弁してよね。こっちはタイマン演習しかしたことないんだってば。

「出力が安定しないのよ。このままじゃ、防げてもう一発ってところね」

玲菜は言う。なるほど、それは非常に残念なお知らせだね。あぁ、まったく、本当に。

「それと光、さっきから何やってんのよ。さっさと攻撃したらどう

なの！？」

「わ、分かってる！」

僕は深呼吸をしながら《朱雀》を反転させ、真横にスライドするように移動させながら照準を白い機体に合わせる。ターゲットマーカー、レッドロック。バレルライフル、発射。

「――楽勝回避！　機体が良くても使い手がしょぼいっていうね！　オートロックなんかに頼ってるんじゃないよっ！」

相手より動画付きの同期式通信が割って入る。挑発のつもりか。しかし宣言どおり、楽勝で回避されてしまった。

『哀れだな』

うっせ。

『たわけ、余所見をするな！　三箇所同時射撃、来るぞ！』

くっ……！

僕は緊急回避行動を――、

いや、無理だ。もう。これでは。

「ぐうぅぅぅ！？」

揺れる機体。相殺しきれなかったルジェムフォトンの圧縮体が、《朱雀》を。

「だ、大丈夫みたい。なんだか分からないけど、障壁が二重構造になってるようね。でももうダメ。次は何も出来ない。光……あんた、次はしっかり避けなさいよ！」

玲菜による罵声。ほほう、なるほど、次でゲームオーバーってことか。

……代わって！　お願い！　リリーナ様！　代わってください！

「天見愛流（あまみあいる）――参るっ！」

そうこうしているうちに、純白の敵機が、いつの間にか目前にいた。一斉射撃はフェイク。それによって生じたスキをついて近付き、そして。

超振動ブレードで、我らが≪朱雀≫を一刀両断。

「させ、るか……っ！」

“そうはさせない”。

こと近接戦においては、実は僕にだって心得がある。近接戦闘演習S判定を受けた身としての意地があるのだ。

玲菜が出してくれた可変式ルジェムブレードで刃を合わせ――斬り結び、押し通り、弾く。

あっぶねぇ。

武器としての性能はこちらが上のようだった。

「そうなることは分かってたよ！　だから！」

敵パイロット、天見愛流が武器を宇宙に捨てながら、吼える。敵機の右肩部が可変し、重い黒色のビームランチャーが顔を出した。

まずい、これは。

……まさかのゼロ距離射撃？

「光！」

「ダメだ、かわせない……！」

僕は思わず目を瞑る。

さようなら、アークコロニー。さようなら、父上、母上。さようなら、玲菜。いや、上之宮さん。

こんなことになるのなら、追放のほうがマシだったような。いや、つーか僕はなんでこんなことしてるんだ？　目的もなく、命を張って、バカみたいじゃないか。

最後に、上之宮さんに、ちゃんと自分の言葉で好きって伝えたかったな……。

まぁ、いいか。

もう呪いも、

これで――

「勝手に終わらせないで欲しいな、小僧！」

――時が止まる――彼女は誰よりも美しい――

勝手に終わらせるな。その言葉は、僕の口から吐かれたものだった。僕ではないもう一人の僕。もう一人の私。リリーナ・ツヴァイ。

一体どうやったというのか。ゼロ距離でのビームランチャー射撃を回避し、《朱雀》は真紅の翼を広げ、一瞬にして白い敵機の背後へと回り込んでいた。

「ナ、ナイスよ、光！　さすがに死ぬかと思ったわ、私も」

「安心するがいい、玲菜。ここからが本番だ……！」

にやりと笑う、生身の肉体を手に入れたリリーナ。

僕とは桁違いのグリップ捌きで、縦横無尽に宇宙を駆け回る。

敵機のビームをまるで寄せ付けない。見ていて安心する、完璧な腕前だった。

（いいか、光。私クラスになればな、防御装備なんて必要がないのだ）

その通りだった。それは決してハッタリなどではない。後一撃でゲームオーバーだろうが彼女には関係がない。当たらなければ、銃

火器など意味がないのだ。そう、彼女の反応速度は異常。《朱雀》の動きが先ほどとはまるで。

「なにこれ、まるで、別人……！」

真紅の機体、天見愛流が恐怖を言葉にした。しかし、もう遅い。

「はあっ！」

一閃に続く一閃。一閃に連なる一閃。

人知を超えた速度で、《朱雀》のブレードが、真紅の機体の四肢を綺麗に斬り落とす。

そして。

左手のバレルライフルでその四つの四肢を爆破しながら、突き刺さるような蹴りで、胴体をすかさず強打する。

「きゃあぁぁぁぁっ！？」

おそらくはこれが。

昨夜先輩を圧倒したという――リリーナの必殺。

天見の悲鳴が木霊した。もはや彼女は何も出来ない。というか、既に動けない相手に向かってライフル四発はすごくもったいないように思うのは僕の気のせいか。

「さぁ、どうする？　まだやるか？」

「くっ……」

モニター越しに、天見が悔しそうにリリーナ――つまり僕を睨んでいた。

俯瞰視点を手にしている僕はハッと気付く。

『敵機二体、逃げていくぞ、リリーナ！』

（了解した。なんだ、貴様も役に立つのだな）

余計なお世話である。

「――が、逃げる者を追いかけている場合ではない。さて、正規の作戦を始めるぞ」

「ええ、そうね」

リリーナは逃亡する二機を黙殺することに決めたらしい。

そして何故か玲菜と意思疎通をしている。……ん？

『……待てリリーナ。なに、次の作戦って。《朱雀》で艦を脱出するとかなんじゃないの？』

僕は僕なりに推理した結論を彼女にぶつけた。そう、僕は未だにリリーナがこの機体を奪おうとしていた理由を測りかねていたのだ。

（バカめ、補給が面倒だろうが。ゲリラ戦術の基本を貴様は知らな

いのか？）

『ああ！？』

（バスター級戦艦、ラズホワイトの指揮権を、これより奪取する）

『……はい！？』

あれ、おかしいな、完全に初耳ですが。なにそれ、もう言い訳出来ないレベルのテロ行為じゃないですか。っていうか、学友がたくさん乗ってるんですけど、この戦艦。

（貴様は黙って見ているがいい。さぁ、お出ましだ。ヤツらの装備を全て無力化し――力を誇示した上で、司令室を乗っ取る）

リリーナは邪悪な笑みを浮かべた。僕の顔で。この戦闘狂、戦いとなるとやたら楽しそうである。

その視線の先には三十機程に渡るＲＸ－２８８。

反逆した《朱雀》を捕らえにきたのだと、容易に分かった。

「Ｂ０１、作戦エリアＹ２より対象捕捉、ＲＧプラズマプリズン、レッドロック」

「Ｃ０４、作戦エリアＧ１より対象補足、ＲＧプラズマプリズン、レッドロック」

「Ａ００よりＡ班各機へ！　１００２より一斉発射準備！」

「Ａ０１、了解」

「Ａ０２、了解」

……あれ？　なんだろう、これは。敵機、ＲＸ－２８８の搭乗者の通信が、頭の中に流れてくるような。

（何か聞こえるのか？　ふむ、だとすればそれは幽体離脱の特権だ。貴様もいっぱしの幽霊ということだな）

リリーナは分かったように頷く。おい待て勝手に殺さないでください。

というかどうするのこれ、この状況。僕の身体を勝手にテロリストにしないでくれませんか、リリーナさん！　さすがにこればかりは、笑えないんですけど！

『妙な真似は止めるんだリリーナ！　いくらエースパイロットの君でも、たった一機でバスター級母艦を攻略するなんて……！　あの中には学園のエリート、エースパイロット達がいるんだぞ……！』

（バカめ。ここでヤツらの網に捕まれば、どちらにせよ、貴様の人生は終わりだ）

『けど……！　無理だ、投降するんだ、リリーナ！』

僕がリリーナを必死に説得する、その時だった。

「一斉発射――開始」

僕の願いはむなしく、一つの戦争が始まった。いつの間にかあらゆる方向に展開していたＲＸ－２８８の部隊より、電子檻構築ラズムが放たれる。

電子檻――当然、その性質を僕は授業で習っている。

ラズムと呼ばれる弾が放たれると、その一定時間後にラズム同士が高圧のプラズマを伴って連結。連結の内側を電磁的にショートさせ、火器管制を破壊。やり方次第では、中のパイロットを丸コゲにする兵器である。早い話が、大きな檻を電子的に生み出し、檻の中を丸コゲにする兵器ってワケだ。

これは――やばい。

「ふふ……ははははは！」

が、しかし。“彼女にはそんなものに意味などなかった”。

――時が止まる――彼女は誰よりも美しい――

圧倒的な速さで、包囲網を突破するリリーナ。ラズムが連結する前に外側に離脱、すぐさま反転し、近い機体から片っ端、刻んでいった。

「貧弱な者のは鉄槌を！」

あるものは、両腕を。

「軟弱な者には粛正を！」

あるものは、スラスターを。

「虚弱な者には圧壊を！」

あるものは、バランサーを。

「脆弱な者には神罰を！」

あるものは、武器を。

リリーナが舞い、ステップを踏む度に、敵ＲＸ－２８８はその機能を失っていった。

僕は敵を殺すなと叫ぶつもりだったが、余計なお世話だったらしい。

（当然だ。彼らは我が手足となるのだからな）

リリーナは邪悪に微笑む。……手足？　ちょっと待て、あんたは何がやりたいんだ？

（決まっているだろう？）

ライフルで敵リーダー機の武装を破壊しながら、リリーナは叫ぶ。

「帝国を……再建するのだ！」

そうしてとある武器の銃口が、ラズホワイトの司令室へと突きつけられるのだった。

銀河最強兵器――アンセル粒子砲。

「チェックメイトね。この至近距離からこのアンセル粒子砲を放てば、ラズホワイトは終わりよ。相手もそれを分かってる。私達の――勝利よ」

玲菜はふぅっと息を吐きながら、手を上に伸ばした。え、なに、勝利？

「聞け、ラズホワイトの諸君！　我が名はリリーナ・ツヴァイ！」

おいふざけるな、違うだろ。あんた一応肉体的には曽根川光だろ。

「自称リリーナ・ツヴァイだと……曽根川光、狂ったか！」

司令部の誰かが叫んでる。ほらみろ、言わんこっちゃないじゃないか！　アホと思われたじゃないか！

しかし、リリーナは構わず続ける。当然か。司令部の会話なんて聞こえてないもんな、コイツ。

「これよりこの戦艦はアークコロニー『ヒノマル』より独立し！『神聖リリーナ帝国』の母艦となる！」

おい待てシリウス帝国どこいった。

つか、なんだ、神聖リリーナ帝国ってなんだ。

「くそう……このまま我らの戦艦は、バカに乗っ取られてしまうのか……！」

司令部は大慌てである。僕のイメージは多分最悪だ。死にたいです。

「降伏せよ！　我はリリーナ・ツヴァイ！　かつて《覇姫》と謳われた五百年前の宇宙最強！」

やめてぇぇぇ！　僕の肉声で恥ずかしいこと言うのやめてぇぇぇぇぇ！

「分かった……ここに降伏を宣言する」

突然。

コクピットにオープンチャンネルで流れる、しわがれた老人の声。一番偉いであろうオッサン、提督の声だった。

なんだかよく分からないが、本当に上手くいってしまったらしい。

「だが提案だ。リリーナ・ツヴァイ」

リリーナ・ツヴァイじゃないです曽根川光です、提督。乗せられないでください。

「何だ？」

「やるからには、ガチでやりましょう……『神聖リリーナ帝国』！」

提督ぅぅぅぅぅ！

「よかろう、貴様の名は？」
「本庄猛（ほんじょうたける）です」
「了解した。タケって呼ぶことにしよう。頑張ろうな、タケ」
「はい、リリーナ様」
提督ぅぅぅぅぅ！

◇

衝撃的な一連の事件から三日。
「おはようございますリリーナ様ぁ！」
「お、おはよう……」
僕は冷や汗をだらだらと流しながら、明らかに年上のおじさんに挨拶をした。
有り得なかった。全てが有り得なかった。
なに、この展開？　一体リリーナはどれだけの人心操作能力を持っているというのか。
何故、あれから三日のうちに、こうも。
「はざーっす！　リリーナ様ぁ！」

「あ、うん……」

「いやぁぁぁぁ！　リリーナ様よぉぉぉ！　素敵ぃぃぃ！」

「は、はぁ……」

何故こうも、こうなのだろうか。あー、言葉にしにくい。

『将たる者、部下に慕われなければならないからな。でなければ士気は下がり、敗北する。私は人に好かれる才能があるのだ』

そうかい、まぁ僕はあんたのこと嫌いですけどね。

『おっと、後ろに天見愛流だぞ』

……うげっ。

僕は即座に振り返る。一歩遅かった。天見愛流の肘が、僕の腹部にクリティカルヒット。

「う、ぐっ」

「おはよう、司令！　やはりこの時間帯は弱いねっ！　キミ、多重人格者？」

「……まぁ、それに近い」

「ふーん、まぁいいけど、とりあえず玲菜から伝言っ！　えっとね、死ねよ豚野郎、だってさ！」

「あれ、どういうこと！？」

『ああ、私のせいだろう』

あんたか！　ちくしょう、またあんた昨日勝手に人の身体動かしたのか！

ため息一つ、涙を呑んで僕は玲菜を探すことにした。よく分からないけど、弁解しに。

◇

「ごめんよ、玲菜……」

「謝って済むならアンセル粒子砲はいらないわ。あんた、私の下着を盗んだでしょ。それを出しなさい」

「え！？」

よし、ワケを聞こうか、リリーナさん。

『そうだな、よし、自分の胸元を触ってみろ』

言われたとおりにしてみる。瞬間、僕は顔面蒼白。

「……ね、ねぇ、光。あんた……もしかして、着てるんじゃないでしょうね……」

「え、いや、そ、そんなバカな」

すっとんきょうな声を出す僕。おいリリーナ何とかしてくれ。ゴースト・エーテルとかで何とかしてくれ。

『仕方ない……一度だけだぞ。それ、“静電気”だ』

「！？」

バチッと電気が弾けると同時――僕の着ていた薄地の軽装が勢いよくめくられた。

淡いローズマリーの天使のブラが――こんにちは――

「……で、言い訳は？」

「……」

瞬間、大きく軽快な弾けるような音が響くと、僕の頬が朱雀色に変わった。

「最低ッ！」

立ち去る玲菜を眺めた後、僕はくっくと笑うオッドアイの幽霊を睨み付ける。

『そう怒るな。私も元は女だ。胸元が気になるときもあるさ』

「うっせぇ！　ペッタンコだからブラなんて不要だろうが！」

「ペッタンコで悪かったわね！」

リリーナに言ったつもりだったが、玲菜に聞かれてしまったらしい。ずかずかと戻ってきた彼女は、思い切り僕の鳩尾に蹴りを入れ込んだ。

「ち、ちが……玲菜、さん、ち、違う……」

「……まったく、まぁいいわ。これで許してあげる」

涙目の僕に向けて、彼女は今度は手を差し伸べた。

「これでも、あんたは私の彼氏なんだから」

「……あい」

彼女は微笑む。僕も釣られる。誤解を解くことが中々に難しく、なんだかんだ、未だに僕らは彼氏と彼女だ。

彼女が好きになった私は僕ではないが、彼女を好きになった僕は私ではない。

奇妙な三角関係を続けながら、僕は立ち上がり、前へと進む。

「さ、行きましょう、“理事長”。そろそろ朝会よ」

神聖リリーナ帝国の国王兼総司令兼桜ノ宮学園理事長となった僕の未来は。

「――了解」

真っ暗なようで、

しかし、

ちょっとは明るいかもしれない――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8914z/

銀河よ滅べ！帝国最強！

2011年12月28日00時54分発行